

第3回報告

ひとり暮らしなんて悪いねん

結婚する馬鹿、しない馬鹿

—私の「結婚」考—

吉田 清彦

1、結婚Ⅱ家庭に異和感おぼえる

いつの頃からか、「結婚」というものに、うさんくささを感じ始めていた。結婚そのもののよりも世間の「家庭」というものの有り様を素直に好しとしない気持、どことなく嘘の臭いを嗅ぎとるようになっていた。大人の世界全体を素直には信じなくなっていた、と言いかえてもよい。周囲の大人の言動を見聞きするにつけ、家庭の父母の有り様を見るにつけ、また幾冊かの小説を読み重ねるにつけ、こんな大人にはなりたくない、こんな生き方はしたくない、という気持ばかりが募っていった。誰もが青春の一時期待つ、どこにでもころがっているような青臭い深癡症、正義感にすぎないかも知れない。長じて社会人となり、人生の荒波にもまれると、ツキが落ちたようにそんなものはなくなり、あたりまえの大人となり、あれほどまでに嫌っていたあの「大人」になるのが普通の生き方かも知れない。私も

大人となり、人並みに世間智にも長け、「大人」の狡さも多少なりとも身に備わってきたことを否定する気はないが、心のどこかで、いや、心の中心の一番大切にしたい部分で、やはり、「大人」にはなりたくない、「大人」にはなるまいという気持を抱えたままである。「あの大人」を決して許さない、決して認めない、という気持を無理には否定しないで三十六年の歳月を重ねた。「学生気分が残っている」とか「大人気ない」とかの世間の非難を、私は一種の褒め言葉と思っておりがたく甘受している。

話を本筋に戻そう。私の結婚Ⅱ家庭に対する異和感を日常の生活の中から二・三具体的にとりあげてみよう。私はこれまでの人生の中で二度結婚の経験を持っているが、その時期友人と街で出会うと必ずといってよいほど「奥さん元気?」、「奥さんどうしてる?」と聞かれる。単なる社交辞令といってしまえばそれまでだが、私にしてみればそこで会話は白ける。私の友人と私の「奥さん」がもとと親しい友人ならば、その消息を尋ねるところは尤もなことかも知れないが、だいたい一、二度しか会ったことのない人から聞かれる。私は「奥さん」の監督者でも保護者でも、またスポーツスマンでもない。聞きたかったら直接本人に聞け、というものだ。友人と会話しているのは吉田個人であって、その「奥さん」とやらの「片割れ」としてしゃべっているのではない。だいたい日本人は（日本人だ

けではないかも知れないが）、家族や家庭を通して、或いは家族や家庭を一つの単位としてその構成一員として人を見るといふ社会であるらしい。「誰その奥さん」とか「誰それのご主人」といふ世間一般の言い方に私は非常な抵抗を覚える。人は人の所有物でも、所属物でも決してない筈である。

もう一つ別の例を挙げよう。結婚すると女性の名前（姓）が変わってしまうことに關してである。結婚によって女の姓が男の姓になる（というより、戸籍法と男の都合により、そう強制せられる）ということほど理不尽かつ不合理なことではない。昨日まで「〇〇さん」と呼んで慣れ親しんでいた人が、ある一日を境にして突然「××さん」になる。具体的に話そう。例えば松田さんが突然中川さんになったとする。松田さんが中川さんに変わるにあたっては、松田さんと中川さんとの間に様々な歴史や経緯があつて、松田さんは納得ずくで中川さんになったかも知れないが、それは二人の間の個人的なことであつて、私には一切あらず知らぬことであり、そんな個人的なことで勝手に名前を変えてもらつては困る。名前は単なる記号にしか過ぎないという人が居るかも知れないがとんでもないことである。私の中で「松田さん」はあくまで「松田さん」であり、例えば名前が変わつても、「中川さん」という名に変わった松田さんではあつても、「以前松田さん」という名前だった中川さん」には決してなり得ない。私はも

ともと「中川さん」という人を知らない、知つてゐるのは松田さんである。「戸主」たる中川氏を知つてゐるわけでもない。例え知つていても、松田さんを、中川氏と結婚した・中川氏の「奥さん」になった松田さん（今は「中川さん」といふフィルターをいちいち通して見るわけではなく、ましてや中川氏の持ち物（所有物・付属物）として見るわけではない。一個の人格として見るわけだから、松田さんは、結婚しようとしまいと、あいかわらず松田さんでしかありえない。

たかが言葉一つ、要は中身の問題、いちいち小さなことにそう目くじら立てなさんな、という声が聞こえそうだが、単なる記号と言葉を軽んじていると、実は言葉が現わすその現実を軽んじることになる。現実が言葉によって規制されることもありうる。言葉によって現実がからめとられる。そういう魔力、強制力を言葉は持つてゐる。前述した「誰それの奥さん」といふ言葉一つとってみても、また「亭主」「主人」「旦那」などという日常普段になにげなく使われている言葉をとってみても、知らず知らずのうちに言葉が現実を縛りつけてゐるものも多い。こだわるべきものは、あくまでこだわり続けるべきである。だから私は、相手が男でも女でも、たとえ結婚して姓が変わつても断固として元の名前で呼ぶ（私の場合は、無理しなくても自然にそう呼んでしまうのだ）。ここで一つの提案がある。戸籍法上はどうであらうとも、結婚し

た後も元の名で呼ぶ、呼ばれるということをして私達の身の回りからでも勵行してゆこうではないか。

2、僕の生いたち

さて話を戻して、私の世間一般の「結婚」といふものに対する異和感、疑念について語ろう。

下重暁子の「女性24歳からのライフ学」

（大和出版）に次のような文章がある。

へ家庭を前提とした結婚、それはそれで結構なことである。目くじら立てて文句をつけたりできる類のものではない。だが私は、家庭を前提としない結婚があつてもいいのではないかと思う。へ極端に言つてしまえば、家庭なんかなくなつて結婚はできるのである。できることなら、家庭という得体のしれぬものから足を離してゐたい。見て見ぬふりをしていたい。（81頁）

私もこの下重暁子の言葉に全く同感である。そもそも私が「結婚」といふものに、とかくこだわるのは、「家庭」といふものにどうしてもなじめないからである。私のこの「家庭」といふものに対する懷疑、不信は、直接的に私の幼少年期の家庭の体験に起因するものである。

私は一九四四年生まれである。長く続いた戦争とそれにひき続く敗戦後の混乱期をくぐり抜けた当時の日本の家庭は多かれ少なかれそれぞれ様々な混乱や紆余曲折を抱え込まざ

るを得なかったに違いないが、私の育った家庭も特殊な事情を抱え込んでいた。詳しい経緯はよく、私がまだ三才にもならぬ時、私の家族はそれまで住んでいた父方の家を離れ、母方の家に移り住むことになる。母方の家の一部屋を借りた間借り生活であるが、それは生家を追われた父親一家が、母方の家にこもりこんだ、と言っても間違いいではないであろう。とにかく以後数年間、私が二〇才になるまで、その間借り生活は続いたのだが、その間私は小さいなりに、「家」というものが持つ陰湿な力を肌身感じさせられ続けてきた。表面では平穏さがかるうじて保たれてはいたが、ひとたび裏に回ると人間というものの持つ酷薄さが渦巻いていた。その頃から私は、はっきりわからぬままに、周囲の人間に対する反逆の姿勢を言動にあらわし始めていたらしい。障子も締め切った薄暗い部屋の片隅で一〇才にもならぬ私をかき抱いて母親が「とにかくにも辛抱しなければ。どんなに耐えられぬことにでもじっと我慢をしよう。吉田家再興の日までは」と繰り返して泣きながら時を過ごしたのは一度や二度のことではなかった。私はただただ悔しさのあふれる一方で、この「吉田家再興」の意味がわからずボカンとしていた。その時の母親の気持は今にして思えば理解できるとして、当時の私は、ただただ周囲の人間とそして親の理不尽に腹を立てるばかりで、周囲に対してこそして親に対して不信の念をつのらせていく

ばかりであった。

父親は、自分の置かれている不本意な立場に対する不満を言葉にすることはなかったが、その鬱積は母親に対する暴力となって現われた。少年時代の私にとって父親は、ただただ恐ろしい存在であり、家庭はただただ息苦しい場所だった。家庭をとり囲む「世間」というものも唾棄すべきものと思わなかった。大学に入学して親元と郷里とを離れた時、とにかくほっとした。何かから解放された解放感があった。一人になって一体自分が何をしたいのか、何をしたいかは全くわからなかったが、とにかく生れて始めて自由に私一人が居ると思った。何をしたいかわからぬままに、何でもしてみた。自分が正しいと思っただこと、自分でやりたいと思ったことは何でもしてみた。遠く離れた場所から親が何と言おうと、世間が何と言おうと、だ。

3、息がつまる結婚

自分に適齢期（そういうものがあるとして）が訪れつつあった時にも、私には結婚や家庭に対するイメージが何もなかった。恋愛は何度もしたが、自分が結婚をして、家庭を持ち子供を持つというのに対して、現実的イメージが全然湧いてこなかった。そんな状態のままに私は二度結婚、離婚を繰り返した。これは考えてみれば無責任なことであり、相手に対して実に失礼なことであった。一度目は自分を過信していて、結婚でない結婚、家庭

でない家庭というものを自分勝手に決め込んで、結局は相手に一方的に負担を負わせ、傷つけるだけで、紆余曲折の後に破局を迎えた。二度目の結婚は三〇才を越えていた。「ひょっとしたらまともな結婚をして、世間並みの家庭を持つことが可能かも知れない、これが最後の機会」と、今度は友人、知人それに親せきまで招いて結婚式を挙げ、いわば世間との「手打ち」までして背水の陣を敷いたのだが、これもあえなく時を経ずして崩壊。もともと結婚や家庭というものに対する何の肯定的な意義を見出さないうままに、世間と表面上の妥協をするという、いわば打算と幻想に乗ってみただけだったので、崩壊するのは誰の目を見ただけでなく、自分の目にも明らか。壊れるべくして壊れて、アッケラカンとしていた。その時自分にはっきりと烙印を押した。「私は結婚不適格者だ」と。

前にも紹介した下重暁子の「家庭を前提としない結婚」というのが、もし本当に可能ならば、もう一度位結婚していいと呑気なことも考えないではないが、これにしても、籍の問題や子供の問題などまだ未解決部分がないではない。何はともあれ、私は二度の経験を通じてつくづく思ったのだが、私は結婚に向いていない。家庭というものが持つ、あの押しつけがましい雰囲気には私は息が詰まるのだ。家庭ないしは家族という単位のフィリタを通じて世間とつきあうことを強制されるわずらわしさと嘘くささとが私には耐えられ

ないのだ。私は一個の人間として何にも捕われずに、何ものにも強いられることなく、自由に生きたい。ただそれだけである。

最近の風潮をみると、若い人ほど早く結婚したがっているようで、全く不思議かつ異常に思える。テレビにあふれるほどある恋愛番組や新婚番組をみていると、他にすることはないので、蹴飛ばしたいくらいだが、案外彼等は他にすることがないのかも知れない。現代の異常なまでの受験、競争、選別教育の中で彼らは、自分でものを考え、自分で自分の生き方を見つけたすという事を全く教えられていないのであろう。他にすることがなく

本の紹介

犬養道子さんの「女が外に出るとき」(中央文庫三百円)、ひとり暮らしの男であるボクには興味深く読める本。社会という連帯の共同体の中における個々の問題、日々の根本問題をどうするのかという視点から、「ひとり」の権利が進んでいる欧米での体験をふまえて、ゴミ収集・集金・日常雑事の整理・ひとり暮らしの人間が家を留守にする時、などの問題に対して「個」の確立を説きながら解決策を提出する犬養さんの発言を「先進国」日本の社会を動かしているおえら方はどう受けとめるか？

(ヒロ)

て、そして世間や家庭からの束縛から逃れて自分たちだけの世界を持ちたいという幻想から結婚を急ぐのであろうが、例えば親の家庭から逃れなくても、結婚は新たな「家庭」を持つということに他ならない。結婚とは普通すなわち「家庭」を持つことであり、それはすなわち「世間」という強制力をかえこむことであるという認識を持たない結婚は、自縄自縛でしかありえず、行きつく先は見えている。下重暁子の前掲の書にも次の様な言葉がある。

「へ家庭ぐらい、今の社会において、ある意味で横暴なものはない。へ抵抗を試みるだけで疲れてしまふ。目に見えぬ糸にたぐられ、家庭という甘い密に全身まぶされ、もがいてももがいても深みにはまってしまう。その意味では家庭は諸悪の根源である」

もって銘すべし、である。

4. 結婚は女性を抑圧する

男女の自由な結びつきである恋愛と、結婚は家庭とは、あくまで別のものであるという認識が必要であろう。結婚は家庭は、その仕組みとして、自由な結びつきである恋愛を容、変質させ、個々の人間の自由な生き方を抑圧する。

また現実の社会において、結婚は家庭によって著しく不利、不自由を抱えこむのは特に女性の側においてである。ここで実際に二・三の女性の声を聞いてみよう。

「結婚とは女と男のきらびやかな愛とか、

セックスとは、本当は何の関係もない。結婚の真のねらいは、男の日常生活における便利さを手に入れること、つまり家事と育児と男の身のまわりの世話を専門にする家内奴隷をひとり確保することにある」(道下匡子「結婚制度のカラクリ」。「思想の科学」一九八一年二月号所収)

「現在の社会システムでは——つまり、会社とか家とか習慣とか親類とか近所とか友だちの目とかの複合体——結婚でソクなくじを引くのは女のほうだ」へ共働きのうえに、家事までしよこまされるのは女。共働きして、料理人と掃除人と小間使いとを手に入れるのは男。これじゃ、どっちがトクか、すぐわかる」(犬養智子「愚かな女だから愚かに生きるのですか」、KKベストセラーズ社)

「へたいいていの女は、結婚すると、役割の中に埋没してしまつて、自分自身の精神の世界を手離してしまう」へ主婦業と呼ばれている仕事は、もともと夫と子に、彼らの人生の勝負をさせてやるための、お手伝いさん業なのである。」(俵萌子「夜明けのココア」、日本書籍)

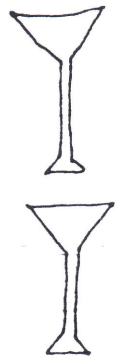
以上の発言のように、女性にとって、かくも不利、不都合な結婚は家庭という社会制度がいままで連綿として存続してきたのは、一旦手に入れた都合のよい制度を男が手離そうとしなかったからである。様々な法律的枠組を作ると同時に、道徳や慣習などという精神的枠組や教育において「男は仕事、女は家庭」

という性的役割分業論の綱目を徹底して張り巡らすとともに、経済的独立をものはばんできた。そもその人類の発生時点における母系制社会が、なぜ父権制社会にとってかわったかについては今だに定説はないが、私有財産の発生におおいに関わりのあることは推測される。自分の得てきた富を継がせるべき子孫が、確実に自分と血のつながりのあるためには、どうしても男中心の家制度が必要であった。

ところで、十八世紀以降の女性解放運動の積み重ねの歴史の中で、父権制社会や制度としての結婚のカラクリは暴かれ始めるとともに、経済環境や社会環境の急速な変化の中で現代の日本の社会においても、結婚に否定的な女とそして男が確実に増えてきている。一九八一年一月に発表された総理府の世論調査の結果によると、二十才以上の未婚女性のうち「結婚を望む」六二%に対して「望まない」が八年前の前回調査の一四%から二五%に増えている。男性は「望む」六八%に対して、「望まない」二二%。同じ調査で未・既婚を問わず二十才以上の女性のうち「一人立ちできればあえて結婚しなくてもよい」が二三%、男性が一三%と、それぞれ前回調査の女性一三%、男性七%に比べて大きく増えている。この傾向は今後も続いていくに違いない。

5、友情と恋愛と結婚

ところでここでもう一度自分に立帰って、



私自身の現在の結婚感について述べてみよう。私が二度結婚に「失敗」したことはすでに述べた。意識の上では究極的に「結婚」を否定しているのであつては、いかに「結婚でない結婚」を意図しようとも、制度としての結婚という枠組は個人の意識や決意を超えて、真綿で首を絞めるような重圧となって生活に乘しかかる。結局は無責任にも途中で放り投げることになる。最大の失敗は、一緒に住んでしまったことである。例え同棲という形であったとしても、同じ家に居を構えてしまうと、そこには「家庭」が始まり、「家庭」は「世間」という社会との関わりの中で、個人の生き方や考え方に枠をはめ、自由を奪い始める。もともと私は、友情と恋愛とを全く別種のものと扱えない。無理に友情と恋愛とを別のものだと考える必要はない。一般に友情が恋愛に変わるといふ言葉がよく使われるが、私は恋愛は友情の変種というくらいにしか思わない。人は人生の場面場面においてその時々によさわしい友情を形づくり、お互いに刺激吸収しあう。もちろん友情は複数に成り立つのが普通である。その友情が一生続くという場合もまれにないではないが、その多くは各人の成長の度合いや生き方の変化に従って立ち消えになったり、決裂したりする。そして

それを人は当然のこととして受け止める。ところが恋愛は結婚という形で完成すると思ひこんでいる人が多いが、私は、恋愛は結婚によって停止し、そして変質すると思う、ということは先にも述べた。恋愛と結婚とはあくまで別のものだ。恋愛も友情と全く同じで各人の人生の場面場面で（例えその時には、これが唯一で最高のものだと思ひ込んだとしても）その時にだけふさわしい形で立ち現れる。いったん結んだ友情や恋愛が長く続く場合もありうるが、それが不変のものと思うのは、自分に対して相手に対しても傲慢な決め込みにしかならない。ましてやそれを結婚という形式で枠をはめ固定しようというのは本質的に無理で無茶な話なのである。

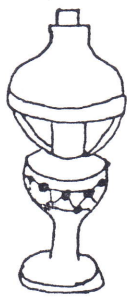
それなのに結婚という制度が永く存在しているのは、子供と私有財産とに理由がある。本来社会にとって共通の子供であるべきものを、親の私的所有物の形をとらせたのは、その方が国家にとって支配しやすい単位（家庭・夫婦・親子という単位）だからである。

友情と恋愛とを分かち者が切り札として持ちだすものにセックスというものがあり、それと関連させた独占欲と嫉妬というものがある。この問題に関して私は、結婚というのは男の側の女に対する一方的な性的独占所有だと考えている。たてまえば別として、実際の現実の性風俗を見ればそれは明らかである。子供ができるという問題をとりはずしてしまえば、性は人間の健康で正常な活動の一

部でしかない。大切な一部ではあっても、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。性を極端に神聖化、美化したり、また反対に軽蔑、不潔視することは全く意味がない。性を家庭内の性、婚内性に閉じこめ、その他の性を性の乱れなどというのは、婚内性（それも女性にだけ一方的に強制される）によって生まれでた子供を自分と確かに血のつながりのあるものとし、家父長制度を固守したい男性の一方的な決めこみにすぎない。性をどう扱うかは、あくまで個々人の生き方の中で自由に決められるべきものである。自分を大切にし、そしてそれと同じ比重で相手を手を大切にするという思慮の中でのみ、とり扱われるべきである。

ひとりぐらし ふたりぐらし

「ひとりぐらしどこが悪いねん」といったついでに、「ふたりぐらしどこが悪いねん」といいたくなる本が「妻たちの復讐」（すずさわ書店）である。要は、ひとりであれ、ふたりであれ、いずれでも選べるのが大切なのであって、結婚を強制する社会にはそのひずみが出てくるということだ。成人したら一度は一人でくらししてみることだとおもう。（草）



6、「別居結婚」のすすめ

結論部分に移ろう。恋愛の過程で「この人とできるだけ多くの時間を持ちたい」と思ったら、別居結婚をすることだ。一種の通い婚である。通う回数が毎日毎晩であるうと、月に一回であるうと、それはお互いの生活の仕方による。相手の生活を極端に乱さない範囲内であることである。お互いに住む家の距離は電車で一と駅の所であるうと、隣り同士、向かい同士でもかまわない。ただあくまでお互いの基本の生活は別々、勿論経済的に別々でなければ意味がない。同居結婚をあくまで否定するのは、同居してしまうと、いくらお互いが努力しても結局は社会的枠組の中に入ってしまう、男女が横に對等にはなく、縦につながり、どちらか一方が（それはほとんどの場合女の側が）不利・不自由になるか、或いは両者共に不自由になるからである。特に、プライバシーがなくなるというのは、人間の精神の自由な発展にとって致命的である。お互いの精神と生活とを支配しあわないで、二人が会いたい時にだけ会い共通の時間を持ち、刺激、吸収しあい、またいたわりあう。そしてその時間以外はお互いがそれぞれの場所自分で個々の人生を全力を尽して生きる。そして再び二人の時間を持つ。ことわっておくが、男の家に居る時、女が男の身の回りの世話をやく、例えば食事を作ったり、パンツを洗ったりということは決してしない。男の

家では男が招いた方で、女は招かれた方だ、料理もあと片付けも全て男がする。反対の場合も同じ、招いた側が全てをする。

この関係がたとえばどちらかが死ぬまで一生続いたとしたら、それはそれで一つの幸福な関係であろうが、反対に途中で御破算になってもそれはそれでまた自然なことである。この自然なあり方を無視し、いったんなりたった関係を無理にそのまま定式化し枠にはめようというのが、いわゆる結婚である。

現在、家庭の崩壊だとか、青少年の不良化だとか、子殺し、親殺しなどが常にマスコミの話題をにぎわせていて、この状態を古い家制度への逆行への口実に利用しようという動きもあるが、私に言わせれば、現実に合わない古い意識や制度の押しつけが現在の混乱を引き起しているのである。各個人が自分を大切にし、そして相手を大切にするという生き方を貫くなかで、古い制度や意識（道徳・慣習・マスコミのいらぬお節介・世間の陰口など）を壊していけば、現在の混乱のほとんどは無くなるのでは、と考えている。

（一九八一・七・五）

